長野市民新聞　2015年5月30日付

カンボジアへ野菜種

貧困解消 食料自給を

横沢町の大場さん　提供の善意 現地へ

1990年代まで20年余り内戦を経験したカンボジアの復興を支援している長野市内の有志の依頼に応じて市内の企業などから提供された野菜の種が、援助物資として有志の手で現地に届けられた。内戦時に多数埋設された地雷の処理を経て復興が進む地域で貧困世帯や孤児施設に支給され、食料自給を高めたり作物の販売による現金収入の確保に役立ててもらう。

種の寄贈は、地雷処理に関する研修や日本と現地の子供同士で行う交流の仲介を目的に2011（平成23）年からカンボジアなどをたびたび訪れている横沢町の自衛官・大場淳治さん（51）が、支援相手の要望を基に、現地で活動する日本のNGO（非政府組織）と相談し企画した。大場さんが支援を行う西部の町バッタンバン近郊は、地雷処理を終えた地域への移住者が増えて復興が進みつつある半面、土地を持たない場合は小作農で生計を立てなければならないなど「経済的に厳しい世帯が多い」という。

提供された野菜の種をカンボジアの人々に配布する大場さん（右）ら

現地にはNGOの協力で水路が整備されたことから、大場さんは各世帯の敷地で野菜を栽培してもらえるよう、種の提供を全国の種苗メーカーに手紙で要請。信州新町の「信州山峡採種場」など2社から、根菜類や葉物野菜など合わせて25キロ以上の種が提供された。

大場さんは種を持参し、5月上旬に8日間にわたり現地を訪問。信州山峡から提供された種は住民に順次使ってもらう分としてNGOに託し、別の1社からの種は現地の孤児施設に寄付した。

このほか、岡田町の「第一学院高校長野キャンパス」の生徒が英語で書いたメッセージカードを孤児施設に届け、施設の子供たちに書いてもらった返事を持ち帰るなど、交流の仲介も行った。

大場さんはこのほど信州山峡採種場を訪問し、金子量昭社長（57）に現地の様子を報告。「水路が整備されたので乾期でも野菜作りができる。現地の人々も栽培に意欲的だ」と話す大場さんに、金子社長は「今回のような形で良ければ、可能な範囲で今後も協力したい」とさらなる支援に前向きだった。